

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 12 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2017

課題番号：24520236

研究課題名(和文)『琉球国由来記』『琉球国旧記』を中心とする琉球王府編纂事業の基礎的研究

研究課題名(英文) Preliminary Research on Ryukyu Kingdoms compilation projects with focus on Ryukyukoku Yuraiki and Ryukyukoku Kyuki

研究代表者

島村 幸一 (SHIMAMURA, Kouichi)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：70449312

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀の前半期に集中して行われた琉球王府の編纂事業の特徴がよく表れているのは、和漢混淆体の地誌である『琉球国由来記』(1713年)の編纂から漢文体の地誌『琉球国旧記』(1731年)の編纂である。それは、単に文体の変化を意味しただけではなく、17世紀から本格的に導入された風水の枠組みによる琉球国の地理の再編成であり、家譜等が成立することにより祭祀の場が「歴史」の舞台として叙述されることでもあった。本研究は、両書の間で編纂されたと考えられる新たな資料『古事集』を分析することにより、それを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The representative work of the Ryukyu Kingdoms compiling project during the first half of the 18th century is the topographical piece, Ryukyukoku Kyuki [Old records of Ryukyu Kingdom] done in Chinese style writing (1731), which was based on Ryukyukoku Yuraiki [Records of the origins of Ryukyu Kingdom], the earlier topographical chronicle written in a mixture of Chinese and Japanese style writing (1713). This research claims that the significance of Ryukyukoku Kyuki meant not only the change in the written styles, but also the reorganization of the kingdoms geography in the framework of Feng Shui as well as the transformation of the roles of religious ceremonies into the stage-setting functions of historical events. This claim was substantiated by the analysis of a new resource called Kojishu [Kamakura Yoshitaros collection of old stories].

研究分野：琉球文学

キーワード：琉球国由来記 琉球国旧記 古事集 中山世鑑 中山世譜 球陽

1. 研究開始当初の背景

琉球王府は、18世紀前後期から約50年間の間、様々な編纂事業を集中的に行っている。そのはじめは『歴代宝案』第一集(1697年)であり、以下蔡鐸本『中山世譜』(1701年)、『久米仲里間切旧記』(1703年)、『八重山嶽々由来記』(1705年)、『君南風由来并位階且公事』(1705年)、『女官御双紙』(1706年)、『琉球国中山王府官制』(1706年)、『宮古島旧記』(康熙46年本、1707年)、『那覇由来記』(1709年)、『おもろさうし』書き改め(1710年)、『混効験集』(1711年)、『琉球国由来記』(1713年)、『蔡温本』『中山世譜』(1725年)、『渡嘉敷間切由来記』(1725年)、『伊平屋嶋旧記集』(1726年)、『宮古島旧記』(雍正5年本、1727年)、『琉球国旧記』(1731年)、『久米具志川間切旧記』(1743年)、『球陽』(1745年)、『遺老説伝』(1745年)、『宮古嶋記事』(1752年)等の編纂である。

編纂事業は内容別に、中国との外交文書を集めた『歴代宝案』、王府の役人の品級、俸禄、官職等を記した『琉球国中山王府官制』、国王の守護神であるヲナリ神である君々や王宮の女官、地方の神女を統括する上級神女(大阿武志良礼)の公事や由来を記した『女官御双紙』、王府の正史である蔡鐸本『中山世譜』、蔡温本『中山世譜』、『球陽』、そして琉球国の地誌である『琉球国由来記』、『琉球国旧記』である。『久米仲里間切旧記』や『八重山嶽々由来記』、『君南風由来并位階且公事』や『宮古島旧記』等の地方(間切・島)から王府が命じて提出された編纂書は、大きくは正史や地誌を記すための資料類と考えられる。18世紀前後期から始まった琉球王府の編纂事業の中心は、やはり正史と地誌の編纂であったことが考えられる。

本研究に取り組む当初の背景は、なぜ18世紀の前後期からほぼ50年間に琉球王府の編纂事業が集中したかに疑問を抱いたことに始まり、それがなにを目指していたかを解

き明かしたいと考えた。

2. 研究の目的

18世紀前後期から集中する琉球王府の編纂事業は、どのようなものであったのか、なぜそれがこの時期に集中したのか。本研究の目的は、それを明らかにしようとするものである。これまでいわれていることは、琉球王府は1609年の島津藩による琉球侵攻からほぼ百年が経過して、ようやく侵攻の痛手から自国の体制を立て直すために、様々な編纂事業を行って琉球国の体制を整えようとしたというような説明がなされてきた。しかし、具体的にはそれがどのようなものであるのかは、明らかにされていない。島津藩の琉球侵攻によって琉球国はどのように変化したのか、百年が経過した時点の王府の体制はどのようなものに変化し、王府はそれに応じてどのような編纂書を作ったのかが、明らかにされたわけではないのである。

本研究の目的は、琉球王府の編纂事業の中心であった正史と地誌の編纂、特に『琉球国由来記』と『琉球国旧記』という二つの地誌の内容を検討して、島津藩の侵攻から百年を経た18世紀以降の琉球王府が目指そうとした国のあり方を考察しようとする研究である。地誌の叙述はそれを編纂する時点の国のかたち、あるいは目指そうとする国のかたちを示した書である。二つの地誌の検討は、18世紀前後期以降の琉球王府が目指そうとした国のかたちを知ることができる重要な資料であると思われる。

3. 研究の方法

本研究は、18世紀の前後期から集中的に始まった編纂事業によって編纂された書のうち、『琉球国由来記』と『琉球国旧記』という二つの地誌の内容を検討して、編纂事業当時の琉球王府が目指していた国のかたちを考察していくことを前述したが、琉球国には18世紀前後期以前にも僅かではあるが、

王府が編纂した編纂書を持っていた。それは、琉球王府の宮廷歌謡集といえる『おもろさうし』(1531年、1613年、1623年)であり、王府の最初の正史である『中山世鑑』(1650年)である。このうち、『おもろさうし』の文体は、平仮名を基調とする文体で記されている。この文体は、仮名書き金石文(漢文体の金石文とセットになっているものが多い)や国内の官人に向けて王府が発給した辞令書の文体と同じく、古琉球期(グスク時代から島津侵攻以前の時代)の国内文書と同じ文体である。また、もうひとつの編纂書である『中山世鑑』は、和漢混淆体である。

報告者が注目するのは、18世紀前後期から始まる王府の編纂事業によって編纂される正史の文体が、蔡鐸本『中山世譜』以降、すべて漢文体で叙述されているという変化である。さらに、これに加えて蔡鐸本『中山世譜』以降の正史は、正巻と附巻という構成で編纂されている。18世紀前後期から始まる王府の編纂事業によって編纂される正史は、漢文体によって記されただけではなく、正巻と附巻という構成で叙述されているのである。

さらに注目されるのは、本研究で取り上げる二つの地誌の変遷も、『中山世鑑』から蔡鐸本『中山世譜』以降の正史の叙述の変化と全く同じであるということである。すなわち、一部の巻を除いて和漢混淆体で記された『琉球国由来記』は、それから二十年を経ないうちに編纂された『琉球国旧記』になると、漢文体で記され、しかも『琉球国旧記』は正巻と附巻という構成で叙述されている。これだけでも、『琉球国旧記』は『琉球国由来記』を単に漢文化した書ではないことが明らかである。

本研究は、第一に『琉球国由来記』と『琉球国旧記』の巻ごとの内容を比較して、その構成の違いを明らかにすることである。第二は、二つの地誌の叙述の違いを明らかにして、それぞれの地誌が示す叙述のあり方を考察

することである。具体的には、同一の項目の叙述の違いや『琉球国由来記』から『琉球国旧記』が記される際に削除された項目と付加された項目等を検討して、それぞれの地誌が示す叙述を明らかにして、それによって18世紀以降の琉球王府が目指そうとしていた国のかたちといったものを考察しようとするものである。

4. 研究成果

『琉球国由来記』と『琉球国旧記』という二つの地誌の違いは、明らかである。『琉球国由来記』は全二十一巻、『琉球国旧記』は正巻九巻、附巻十一巻という構成になっているが、『琉球国旧記』には『琉球国由来記』にはない巻五「古城 関梁」、附巻巻四「泉井」、附巻巻五「江港」、附巻巻十一「風俗」という巻が新たに立てられて地誌が叙述されている。これだけでも、『琉球国旧記』は新たな枠組みで琉球国の地誌を叙述する姿勢が窺われる。その内容を示すと、例えば『琉球国由来記』巻頭の巻一が王城の一年の祭祀・公事を記した「王城之公事」で始まっているのに対して、『琉球国旧記』は「王城之公事」に相当する「公事」は巻三に配置され、巻一は「首里記」「泊邑記」「那覇記」「唐栄記」という構成になっていることである。

このうち、「泊邑記」は『琉球国由来記』の巻七「泊村由来記」に対応し、以下「那覇記」は『由来記』の巻八「那覇由来記」、「唐栄記」は『由来記』の巻九「唐栄日記全集」と対応するが、『琉球国旧記』巻一の冒頭の「首里記」は、『由来記』の巻六「国廟地理記」「王陵地理記」を取り入れ、それに新たに加筆するかたちで、『由来記』巻三「事始乾」や巻五「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」等から記事をとって、「1 中山城」「2 国殿」「3 南殿」「4 北殿」「5 世誇殿」「6 附 地理記」「7 坊陵」「8 王陵」「9 附 地理記」「10 東宮」が叙述されるという構成になっている。このように、『琉球国由来記』と『琉球国旧記』

とは、その冒頭の巻の構成から大きく違っている。『琉球国旧記』は、巻頭冒頭に「首里記」を置き、王府の中核である王城の叙述から始めて、しかも二つの「地理記」によってそれを根拠付けている。「地理記」とは、琉球が島津藩の侵攻以降の近世期に中国から唐栄といわれる人々（中国からの渡来者）を中心に本格的に取り入れだした風水である。『琉球国旧記』は、まず王都首里を風水によって根拠付けようとする姿勢を強く持っているのである。

それに対して、『琉球国由来記』が重きを置くのは、巻頭に「王城之公事」を置いたことでも知れるように、編纂当時の王府の祭祀・公事を叙述することにあるといえる。『琉球国由来記』は、巻五「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」があり、巻十二以下が「各処祭祀」になっていて、「地方」（間切・島）の祭祀が叙述されている。『琉球国由来記』は、大きくは琉球国全体の祭祀・公事の叙述に比重を置いた叙述になっているといえる。

実は、このことと関連して、『琉球国旧記』には『琉球国由来記』にない巻五「古城 関梁」等の巻があることを前述したが、特に「古城」とされる城（グスク）の叙述が、『琉球国旧記』にあることは注目される。グスクは、『琉球国由来記』では主に巻十二以下の「各処祭祀」に記される御嶽・殿の叙述にある。琉球国の行政単位である間切・島の多くにはグスクがあるが、そのグスクには祭場である御嶽・殿が存在する。つまりは、『琉球国由来記』ではグスクの叙述は、祭場としてのグスクであるといえるが、『琉球国旧記』になると祭場であるグスクとともに、古蹟としてグスクの叙述にもなっているということである。

このように、グスクが祭場と古蹟とに分化して叙述されだすのは、17世紀の中葉から成立し始める家譜の影響があると考えられる。家譜記事は、グスクの領主であった按司

を、氏の始祖として叙述している。その家譜記事を取り込むかたちで、正史の叙述がなされる。特に、それは蔡温本『中山世譜』から目立ち始める。家譜記事とそれが反映したと考えられる正史の叙述が連動して、『琉球国旧記』の叙述に影響したと推測される。すなわち、グスクの叙述は、祭場としてのグスクと「歴史」の舞台になったグスクに分化して、『琉球国旧記』に叙述されることになったといえる。『琉球国旧記』の叙述には、風水によって捉えられた国土がより鮮明に表れてくるとともに、本格化した家譜記事や正史に描かれる始祖の「歴史」が反映されているといえる。

『琉球国旧記』は、巻頭冒頭に「首里記」を置いていることは前述したが、これを含めて「古城」とされる城（グスク）の叙述は、新たな資料である『古事集』（鎌倉芳太郎資料）の叙述が、既にそのような叙述であった。

『古事集』は、『琉球国由来記』と『琉球国旧記』の中間に書かれた資料と推定され、『琉球国旧記』の素案になった資料と考えられる。本研究では、王府が編纂した二つの地誌『琉球国由来記』と『琉球国旧記』との叙述の違いを明らかにしたことともに、その間に『古事集』があったということを具体的に示した。本研究の成果は、以下に記した「雑誌論文」

から までの論文であるが、特に は本研究の中核的な成果である。 から は、「図書」 に収めた。

なお、『古事集』に入っている「順治康熙王命書文」は、三番目の琉球王府の正史『球陽』の資料のひとつになっていると考えられる。「順治康熙王命書文」の記事と『球陽』の該当記事の比較は、『球陽』の叙述を考える際には、重要な資料となる。また、「順治康熙王命書文」に記されながら『球陽』が採らなかつた記事も、『球陽』の叙述を理解する上で参考になる。これを の論文で明らかにした。これを、研究期間を延長した最終年

で明らかにできたことも大きな成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

島村幸一「琉球の「歴史」叙述-夏氏(内嶺家)・毛氏(豊見城家)の家譜記事と正史記述を中心に-」『立正大学大学院文学研究科紀要』第 29 号、2013、47-77、査読有

島村幸一「『宮古島旧記』(雍正 5 年本)に記されたアヤグ-「地方旧記」の歌謡世界-」(『琉球 交叉する歴史と文化』勉誠出版収録) 2014、96-118

島村幸一「佐銘川大主由来記」論-第一尚氏を戴く氏の物語-」『南島文化』第 36 号、2014、1-18、査読有

島村幸一「『琉球神道記』にかかわる「琉球言説」」『立教大学日本学研究所年報』第 12 号、2014、78-88、査読有

島村幸一「琉球から見た『椿説弓張月』」『沖縄文化研究』第 42 号、2015、233-253、査読有

島村幸一「『琉球国旧記』の編纂-『琉球国由来記』から『琉球国旧記』へ-」『立正大学大学院紀要』第 31 号、2015、29-68、査読有

島村幸一「『周蘭両姓記事』(糸嶺家伝)-家譜の外縁にある物語-」『立正大学人文科学研究所年報』第 52 号、2016、27-53

島村幸一「『古事集』(鎌倉芳太郎資料)の叙述-『琉球国由来記』と『琉球国旧記』にふれながら-」『立正大学大学院紀要』第 33 号、2017、27-60、査読有

島村幸一「『球陽』の叙述-「順治康熙王命書文」(『古事集』)から-」(『東アジアの文学圏』笠間書院収録) 2017、344-359

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 2 件)

島村幸一編著書、勉誠出版『琉球 交叉する歴史と文化』2014、441

島村幸一、勉誠出版『琉球文学の歴史叙述』2015、423

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
島村幸一 (SHIMAMURA, Kouichi)
立正大学・文学部・教授

研究者番号：70449312

(2)研究分担者 ()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()